ニ今後直チニ高等小學卒業ノ者ヲ取リテ技藝ノ初歩教育ト共ニ本校ニ於イテ普通學ヲ併セ教フルコトヲ得ベキ方法ヲ設ケサルヘカラズ　宜シク三四學年ノ豫備科〔解説6〕ヲ本校課程中ニ新設スベキ必要アリ

建築科ハ本校開設以来規則中ニ在リテ實ハコレヲ欠クコト久シ而シテ現今ノ圖按科中ニ建築装飾ヲ兼修セシムトイヘドモ固ヨリ完全ナルコト能ハズ　宜シク建築装飾科〔解説7〕トシテ新ニ設備ヲ全ウスベキ必要アリ

本校卒業生ノ圖畫教員タルモノ比年漸ク諸學校ニ需要セラレテ未ダ遥ニコレヲ充タスニ足ラス　將来本校ニ於ケル圖画講習科ヲ擴張シテコレニ應スルヲ要ス

石材彫刻ノ教室ハ未タ實際ニ施設セザルヲ以テ次年ヨリコレヲ設クル必要アリ

校舎ノ狹隘ト不適當トハ前項設備ノ中ニ記シタル如クナルヲ以テ校舎改築ノ必要ハ年ヲ逐フテ迫リ来ルヲ認ム

本校ニハ未ダ雨天体操場ノ設ナシ　宜シク速ニ設置ヲ要ス

圖書標本等ハ殊ニ未ダ不備ナルヲ以テ漸々増備スルノ必要アリ

助教授ノ不足ハ教課上最欠典トスル所ナルヲ以テ之レヲ充スガ爲メニ費用ノ定額ヲ増スヲ必要トス

従来學生費ノ少額ナルガ爲メニ生徒ヲシテ修學旅行ヲ爲サシムルコト充分ナル能ハス　従ヒテ實際ノ見聞ヲ廣クシテ良績ヲ擧ゲシメ難シ　由リテ其増額ノ必要ヲ認ム

雑件

四月十五日及十二月十一日ノ両度生徒成績品ヲ差出スヘキ旨東園侍従本校ニ臨ミテ相達セラレタルヲ以テコレヲ差出シテ　天覧〔解説8〕ニ供シタリ

研究生實地練習ノ材料ニ資セムカ爲大阪府滋賀縣及廣島縣ニ於ケル國寶修繕〔解説9〕ノ事業ヲ引受ケ次年ニ於イテコレニ従事セムトスル準備ヲ成シタリ

解　説

1　塑造科新設

明治三十二年九月、彫刻科中に塑造科が設置された。このことは同年五月一日の『官報』所載文部省告示第六十号に

「東京美術學校學科彫刻科中に塑造科を加へ九月より授業を開始す」

と記されており、『東京美術学校一覧（従明治三十二年至明治三十三年）』所載「沿革」に

「三十二年九月彫刻科中ニ塑造科ヲ新設シ又木彫科ノ寫生ハ塑土ヲ以テ學習セシム」

と記されている。

それ以前の彫刻科内には制度上木彫科、石彫科、牙角彫刻科の区分があり、今回これに塑造科が加わったのであるが、石彫科と牙角彫刻科は有名無実となっていたので、事実上は木彫科と塑造科に二分されたことになる。

なお、塑造科設置に伴い、翌三十三年十月に次の内規が設けられた。

塑造成績品處分規程　明治三十三年十月二日改定

一彫刻科各生徒塑造成績品ノ内優等ナルモノハ之ヲ石膏ニ取ラシメ學年末試驗採點ノ用ニ供ス

但シ右ニ用ヰル石膏ハ實驗用材料ヨリ之ヲ給ス

一前條石膏ニ取ラシムル物ハ凡生徒一人ニ付一學年貳個ヲ以テ定準トス

一生徒學年末ニ於テ其學年中自己ノ製作ニ係ル石膏成績品ノ拂下ヲ望ム時ハ材料代價ヲ以テ拂下グベシ

但シ學年末ニ於テ本文ノ請求ナキ石膏成績品ハ其時ニ臨ミ適宜之ヲ處分スルモノトス

（『明治三十五年現行　東京美術学校処務規定及心得』）

この塑造科設置により大村西崖、白井雨山を中心とする彫刻教育改革運動（本書第一巻352～358頁）は漸くその目的を達した。『雨山先生遺作集』（昭和四年大矢寧明編集発行）には設置を促進するために校長を通じて文部省に建白した意見書（原本所在不明）が掲載されており、設置の趣旨が明示されているので、左にこれを転載する。

小生倩々我彫刻界の現況を考察致候に、其趨勢寫實に傾き、從來我彫刻の模範とも見倣し候佛像の如きも、其彫法全く非寫實的なるが爲め、斯道に志あるもの今日となりては、左まで貴重の標本とも思惟不致。反之西洋の彫刻物とし云へば、之を尊重する餘、そが些細なる寫眞に至までも爭ふて之を購ひ、常に之を座右に置て參考の用に致し候。右は獨り西洋彫刻家のみならず、我從來の彫刻家に至るまで皆斯る次第なることは、實に斯界今日の有樣に御座候。時運既に如斯、隨つて隨所々々に於て開會致候彫刻諸會に出陳致す作品の如きも、年を逐ふて寫實的のものと相成候は、不可爭の事實に御座候。是果して彫刻界に取りて可喜現象か、將た可嘆兆候かと云ふに、寧ろ大に可喜事にして、正に斯界の一進境に達せしものたるのみならず、斯く相成候は自然の勢にして、將來遂に愈々此方面に向つて進歩致候は、亦疑ふべからざる事實と被存候。そは又如何なる故かと申候に、由來我彫刻品はこれを西洋の作品に比すれば、極めて幼稚なるものにして、其手法の如きも頗る不完全たることを免れず候得ば、一般の人々が漸く精細なる觀察力を備ふるの今日に至りては、斯かる幼稚なる彫刻物にては到低滿足不致、隨つて自然範を西洋の作品に取るの傾向と相成次第に御座候。然らば寫實的のものが美術の眞意に合ふものなりやと云はゞ、そは誰人も首肯せざる所加之美術は各國特殊の趣味ありて、美術の貴き所以は全く此殊風の存するが故なり。然るに西洋の彫刻法に倣ひて粘土を使用せんか是れ我の特風を捨てゝ彼の奴隷となるものなりなどと心得らるゝ人も有之候得共、そは物によることにて、彫刻材體の上に就ては無用の謬見と被存候。以上陳述致し候如く、我彫刻術をして世の進歩と共に發達せしめんには、是非共寫生を爲さゞるべからす。寫生をなさんには勢ひ粘土を使用せざるべからず、如此にして始めて彫刻教育の完全を期することを得らるべく、美術學校に於て此重大なることを等閑に附し居り候〔ママ〕は。實に彫刻教育上の一大缺點と存候間、宜しく速に之を決行せられんことを希望に不堪候。且つ人體の骨格筋肉等の參考に資すべき彫刻物は、我邦のものには絶て無之候故、西洋彫刻物を採用して研究の一助に供し候はゞ、是亦大なる稗益と相成べくと存候。文沉漫にして意を盡さず、又禮を失する言も可有之と存候得共、幸ひに其罪を問はず、唯愚意の存する所を御諒察下され候はゞ、難有被存候。

新設された塑造科の中心的指導者となったのは長沼守敬である。長沼はこれより先き、美術学校騒動直後の明治三十一年七月十一日に西洋画の浅

井忠と一緒に教授となったが、それは大村西崖が塑造科設置準備の一環としてとった措置で、このことを西崖は自著『東洋美術史』（大正十四年五月。図本叢刊会）のなかで次のように言っている。

長沼守敬

初め美術學校の成立には國粋保存の意味を含んでゐた爲に、西洋風の塑造は入れず、日本の古彫刻を本とした教育で、專ら木彫であつた。然るに是より先、工部大學の美術部に伊太利の塑造家ラグウザが聘せられて來て、その教を受けた者もあつたけれど、妙手は出なかつたが、明治二十年に伊太利に留學した長沼守敬が歸朝して、始めて洋風の塑造を能くし、銅像の〔原型カ〕模を造つて名を世に馳せた。三十一年に予が學校の教務庶務を管掌した時、長沼を薦めて教官とし、始めて塑造科を置いたのが「モデル」を使つて寫生をやる洋風塑造の勃興する本を成したのである。

これによって長沼が選ばれたのは塑造技能の優秀性によるものであったことがわかる。

しかし、長沼は同三十三年二月十七日には早くも辞職してしまい、藤田文蔵が同年四月二十日に教授に昇格して後を継いだ。長沼はこの短い教授時代について回想記の中で次のように述べているが、辞職の理由もここに明らかである。

十二、美校教授時代

歸朝して見ると丁度、美術學校の校長岡倉君は私行問題によつてやめさせられ、教授連が一致して辭職するしないといふ例の大騒動が起きてゐた。お話ししなかつたが、博物館へ入る爲一旦美術學校創立事務所を退いた私であつたが、黑田清輝君が油繪主任の頃、また美術學校へ短い期間ながら復職してゐたのであつた。

復職の動機が又實に變つてゐる、少し精しく話さねば判らぬが、靖國神社の境内の大村益次郎の銅像を作つた大熊氏廣君についてはこんな話がある。大村益次郎の銅像を大熊君がやると云ふ話の頃、彼が伊太利へ行くと云ふので、いつ迄も待つ譯にはゆかんとの建設委員の説を持つて原田直次郎君が私の處を訪ね、ひとつ君がやつてみないかと話したので、直接大熊君を訪ねると、丁度三菱の岩崎彌太郎氏の銅像を作つてゐる處であつたが、私が率直に、君が若しやれんで快く讓つて呉れるなら私がやらうではないかと云ふと、彼は見る〳〵顔色を變へた。その爲であらうか、それ以後彼は男らしくもなく方々へ行つては私の害になるやうな事をしやべり歩いた。

彼は美術學校の教授になりたくてたまらず、伊藤博文公の添書を貰つて岡倉君を訪ね、盛に運動したのだけれど、皆は彼の人格を知つてゐるので嫌つて入れまいとするが、何しろ伊藤公の添書のあることとて一概に斷り切れず、美術學校の教授連が作戰を凝らして、實は此方にもう長沼君が一足ちがひで入つてしまつたと體よく拒絶して、さう斷つて置いてから直ぐ光雲君が私の處へ先生になつて呉れと頼んで來た次第である。云はゞ大熊を締出す爲に私を入れたという譯で、彼には何とも氣の毒な次第であつた。

それを伊太利へ行くについて又退いたのであるが歸つてみると此の大騒ぎなので、うつかり顔も出せんとじつとしてゐた。此の騒動で岡倉君

や橋本雅邦君が學校を退き、女子高等師範學校の校長をしてゐた高峯〔嶽〕秀雄〔夫〕氏が、美術學校の校長心得を兼ねることになつたが、兼務が出來ないので博物館の理事をしてゐた久保田鼎氏が高峯〔嶽〕氏に代つて校長となつた。久保田氏が私の處へ訪ねて來て、又出馬を懇請されたのでまた美校に復職した。これは明治美術協會〔明治美術会〕の相談の結果で、洋畫の方は黑田君の他に淺井忠君が推薦され、彫刻には私が推されたのである。

さて、いよいよ私が初めて美術學校に塑造部を始めたところ、生徒達は此の新氣運に興味を以て、木彫の方の生徒なども一年か二年損をして西洋彫刻の方へ集つて來たのであつた。それ故、九州博多の日蓮像を造つた木彫の先生竹内久一君は、大分私を妬視し生徒の足留めなどを策したものである。高村光雲君や石川光明君などは私と親友であつたので、そんな事には拘泥しなかつた。光雲君も竹内君の小心翼々たる態度に困つて、やつつけろとも云つたが、光雲君を教授に推薦したのが竹内君なのでさうも行かなかつた。

私は此の時の美術學校入りは教授の格で高等官六等年俸九百圓で、淺井君も私と同等であつた。助教授に白井保次郎君がゐたので隔日に出勤した。その時分の生徒でよく出來たものに朝倉文夫君の兄渡邊長男、〔長沼自筆訂正本では削除〕水谷鐵也、武石弘三郎などがあつた。渡邊君は世間で非常に有名になつてゐる廣瀨中佐や乃木大將の銅像を作つた男である。

自分は助教授の白井君とあまり意見が合はなかつた。教授と助教授は車の兩輪の如くであるべきなのに、意見が合はなくてはと、後任助教授に近藤由一君を建築裝飾の技術上校長に推薦しておいたが、それ丈けの理由で白井君を追出す譯にもゆかん。何か白井君には適當な椅子を見つけようと思つてゐた。白井君に對しては校長の久保田鼎氏も好く思はず何れやめさせようと私に約してゐたのであるが、こんな事情が表面化して來ると、久保田氏はそんな事を云つた覺えは全然ないと黑田君に話した。それで私は校長の二枚舌を憤つて、あれ程私に云つて置きながら今更その言を翻すとは不都合ではないか、と詰寄ると、言はん、斷じて云はぬとの返事なので、そんな食言をする校長とは今後お話する必要はないと、辭表を提出して仕舞つた。辭表を出して間もなく、ある日同朋町の江戸前料理「伊豫紋」へゆくと、美校の助教授連が來てゐて、あなたにやめられては困ると說きたてられた。〔長沼自筆訂正本では「黑田」〕高村君など心配してわざわざ私の家へ來られ、色々思ひ留まるやうに宥めて呉れたが私の決心は變らなかつた。私は馬鹿正直で仲々きかぬ氣の性分なので、これで一生には隨分損をしたと云へば云へよう。

前後するが、文展第一回の彫刻の審査員は竹内、高村、石川、私の四人であつた。その頃審査員に對する文部省の御禮といふのは、文部大臣が精養軒で洋食を一回、次官が日本料理一度を御馳走して呉れる丈けであつた。後融通がつくやうになつてカフス釦、衿止めなどを呉れた。

柳澤と云ふ人が次官の時、柳橋で御馳走された。その時私の右側に日本畫の下村觀山、竹内栖鳳、菊地〔池〕芳文君などがゐたが、竹内久一君は酒癖が惡いこととて雅邦の一弟子である觀山君の目の前で、雅邦の惡態をついた。觀山君も亦酒癖のよからぬことだから、其儘無事に濟む道理がない、竹内君が便所に立つとその後を追ひかけて行つて、いきなり拳固で竹内君を撲りつけたから、えらい騷ぎになつた。

翌日竹内君は私に會つてもじろりと白眼で睨んだきり挨拶もしない。生徒を私に取られて以來快〔かカ〕よらず思つてゐた彼は、私が下村君を教唆したものと邪推したのであろう。

美術學校は退いたが、仕事はそれからそれへとあつた。私の後はクリスチャンの藤田文藏君が入つた。教授としての在職二年未滿であるが、それ以後の主〔もト〕だつた展覽會、博覽會の彫刻審査は大抵やつた。〔下略〕

〔「現代美術の揺籃時代、長沼守敬」高村光太郎編〕

『中央公論』第五一年第七号。昭和十一年七月一日。）

明治三十二年九月の新学期（学年始め）より塑造科の授業が始まった。当初の教師および担当は後出「東京美術学校々長及教員一覧」に記されているとおりであるが、なお詳しく記せば教授長沼守敬と助教授白井保次郎（雨山）が彫刻科予備之課程の塑造と塑造科第一～第四年級の指導を担当し、嘱託藤田文蔵および同大村西崖、助手黒岩倉吉（淡哉）が彫金、鍛金、鋳金三科の予備之課程および第一～第四年級の塑造授業を指導した。左記は塑造科発足後間もない頃の彫刻科の生徒姓名である。

木彫科

第一年　なし。

第二年　高村光太郎、石川成録、宮原顕蔵

第三年　青木外吉、本保義太郎、足立厚実

第四年　船井登久太郎、長愛之、石井徳千代、阿部光治

塑造科

第一年　遠藤忠雄

第二年　島宗磨瑳雄、柴野健作、細谷三郎、山本筍一、水谷鉄也

第三年　武石弘三郎

塑造撰科

第一年　杉本傳　吉川貞夫、山本恒

第二年　堀川鼎

研究科（兼修者も含む。）

木沢禎（木彫、塑造）、清水亀蔵（塑金、塑造）〔彫金の誤りか〕、籾井菊治郎（鋳金、塑造）、野口藤三郎（塑造、木彫）、信谷友三（塑造）、渡辺長男（同）、秋山要治（木彫）、香取秀治郎（塑造、鋳金）、松原源蔵（木彫）、香田麟橘（塑造、鋳金）

（明治三十三年二月二十日発行『東京美術学校一覧（従明治三十二年至明治三十三年）』による。）

ところで、前出『雨山先生遺作集』には塑造科設置の翌三十三年に白井雨山が全国の中学校その他の学校に送った勧誘書も紹介されている。これも原本の所在は不明であるが、資料的価値は高いと思われるので左に転載する。

拝啓時下餘寒の候愈御多祥御勤務の段奉南山候。陳者我東京美術學校に於て、昨年以來彫刻科中に塑造の科を新設致され候處、爾來生徒は增加し來り、寔に近來彫刻教育の一進歩とも可申義に有之候。右は時勢の進歩に伴ふ必然の現象には候得共、創設日猶淺きと、普く世間に流布せざるが爲め、地方人に在ては自然其効用を解せざる向も往々可有之と存候に付ては、大畧塑造彫刻の効用を申述べ御參考に供し置候間、一應御通覽下され、御地方各學校生徒中當校に入學志望の者へ、可然御披露被下將來有爲の青年をして天賦の技能を發揮せしむる樣、御勸誘被成下候はゞ、我彫刻界の爲め無上の慶事に有之候間、此段偏に御依頼申上候。敬具。

猶附て申上置候事は、本年より入學規程も別紙の通り改正に相成、中學卒業の者は無試驗にて假入學を許さるゝ便利を得、當校に於て若干月繪畫を練習せしめたる上、本入學を許可せらるゝ義に有之。此若干月と申すは二ヶ月乃至三ヶ月間にても繪畫を履修せしめ、當人に於て果して美術上の思想を有するや否やを認定するまでの主意にて思想だに認められ候はゞ、無論入學は許可可相成義と存候。

將又各科志望の者一般へ繪畫を履修せしめ候所以は繪畫は各藝術共通の

藝にして、之を以て思想の有無を判定致す事最も適當の方法なるか故に有之候。

塑造彫刻の効用

一、塑造彫刻とは換言すれば西洋彫刻にして主として泰西に行はるゝ彫刻の手法に則ること。

一、塑造彫刻は外國に行はるゝ油土（油土は何時も同じ軟かさの度合を保ち、寒暑に逢ふも會て堅軟の度を變ずることなく、且つ數十年の久しきを經るも絶て變化あることなし）、及普通の粘土を材料とするが故に、木、竹、牙、角等の如き硬材と異り添削自在にして彫刻研究に最上の材たること。

一、塑造一たび成るの後に於ては、之を石膏型に脱き取り、堅質のものとなし、以て鑄造、木彫、石彫其他諸彫刻の原型となすこと。但し油土は如此にして幾回も使用するなり。

一、塑土は以上の如き材質なるを以て、添削増減して十分研究をなすの用に便利なるのみならす、禽獸、魚介、人物等、苟くも寫生彫刻をなさんには此材料に依らざる可からざること。

一、近時肖像彫刻の需要頓に増加し來りしが、之が原型は皆塑土を以て作爲すること。

一、建築、〔ママ〕裝飾、其他諸般の工藝彫刻の原型も、亦皆此材料に依て作爲せらるゝこと。

要之塑土は如此添削増減自在の材なるを以て、金石、牙角、其他諸般の彫刻を爲すには、皆先づ此材によりて形狀を案じ、意匠を練り、以て原型を作り、而る後之を各種の材に移して成品となす、是故に塑造彫刻は各種彫刻の本源にして、亦實に之が母たり、苟くも彫刻美術に從事するものは、塑造を習得して原型を作爲せば、斯道の能事了れりと云ふも誣言にあらず。

以上述べ來りし如く塑土は彫刻至利至便の材なるか故に、近來東京の如きは木彫家と云はず、鑄造家と云はず、石彫家、牙角家、乃至諸工藝家に至るまで、皆此材によつて先原型を製するにより、形狀大に整ひ亦昔時の如き體格姿態の不具なるものを見ることなし、他方に在りても殊に陶磁器等の產地に此技術を傳播せしむる時は其効益の偉大なること蓋し豫想の外にあらん。

なお、高村光太郎は父光雲に木彫を学んだのちに本校木彫科に入学したが、彼は次のような回想記を残している。

〔上略〕私は明治三十年、十五歳で東京美術學校彫刻科に入學したのであるが、〔予備之課程〕豫科を一年すまし、それから彫刻科一年となり、二年の時だつたかに彫刻科が木彫部と塑造部とに別れ、私は木彫部の生徒となつた。すると二年の終りか三年頃に、木彫部でも人體研究を粘土でやる必要があるといふことになり、木彫の外に油土でモデルによる塑造の勉強がはじまつた。塑造部と同じやうな部屋に同じやうな道具や廻轉臺が備へられ、そこで山田鬼齋先生を擔任教授として、初めてモデルを使つた。これが彫刻科がモデルを使つた最初である。私は十七歳、同級の生徒も皆十代か二十歳がらみの青年七人ばかりだつたので、大に皆この勉強に期待した。ところがその最初に來たモデルは四十歳くらゐの男で、人力車夫といふことであつた。裸になつてモデル臺に立つたが、褌をしたままであつた。先生は居らず生徒達には文句をいふ權利がなかつたので、そのまま油土を仕事臺にのせて一尺二三寸の塑造をはじめた。どこからどう作ればいいのか指導者が一人も居なかつた。そのうち山田先生が紋附袴でやつて來られて部屋に入るなり、モデルの車夫を叱りとばした。なぜ褌を取らんかといふのである。車夫はお菊婆さん〔モデル周旋業者宮

崎キク―編者註〕との約束ではこれでいいんだと言ひ張る。先生は、ここは學校だ。そんな我がままは許さん。美術の手本になるのが分らんか、といふやうなことをいつて、いやおう言はせぬ勢でモデルをやつつけた。車夫も弱つたやうであつたが、ぢや、いよいよお開帳か、と言ひながら褌を取つてモデル臺に立つた。生徒達はどうなることかと思つて皆默りかへつてゐたが、これで安心して仕事にかかつた。ただこの車夫が今日ぎりで、明日は來なくはないかといふ心配が起り、大に車夫にサービスした。車夫は翌日も來た。それからずつと美術學校のモデルをつづけてゐたやうである。このモデルは形が惡く、出つ尻のガニ股で、頭がひどく大きかつた。生徒達の習作もそれに劣らぬ滑稽なものだつたらうが、自分達では何にも分らず、山田先生がどういふ教導をされたか、それは今忘れてしまつた。その後で何でも二十歳ぐらゐの肥つた女モデルが來て皆張り切つて勉強をし、その習作を一同が學校の石膏係（小澤松五郎とかいつた人）に頼んで石膏にとつてもらつたりした。その石膏型が七體出來上つてずらりと竝んだ壯觀はみごとであつた。まつたく漫畫以上の滑稽さであつたらう。

私はそれから三年、四年とモデルの勉強をつづけ、四年の半ばから卒業製作にかかつた。卒業後も研究科といふのに籍を置いて相變らず學校に通つてモデルを使つた。モデルは大てい一週間に一人入れかはるので、その間に使つたモデルの數はかなり多かつた。男もあり女もあつたが、男は多く形が惡かつたり、痩せて貧弱で、病人じみてゐたので女の方が多かつた。今日から考へるとひどいモデルばかりで、少し形がいいと思つたのは二人か三人であつた。中に一人やせ型の美人があり、生徒間に人氣があつたので、よく繰りかへして使つた。習作もだんだん大きくなり、後にはいつでも等身大のを作つた。生徒が使ふ油土の量もかなりのものだつたが、これは會計課が熊野屋といふ輸入商からイタリヤ產のものを取り寄せた。教室の煖房用としてはトタン製のコバン型のストーヴを使ひ、石炭でなくて薪を使つた。モデルのポーズは生徒間で相談してきめ、先生は火曜と金曜とに來て、批評したり、直したりした。山田鬼齋先生は程なくやめて〔鬼齋は明治三十四年二月二十日歿――編者註〕、あとは黑岩淡哉先生、白井雨山先生などといふ方々がうけもたれた。しかし生徒達はもうなかなか生意氣になつてゐて、先生のいふことをあまりきかなかつた。私は獨學のつもりで、フランスのサロンのカタログや、西洋の美術雜誌の挿畫の彫刻の寫眞などを參考にした。もとより甚だ幼稚で、今日から見るとつまらない大サロンの彫刻にひどく感心したり、物語性のある構圖に深遠な意味があるやうに思つたりした。そして目の前にある生きたモデルがさつぱり分らず、空しくあはれな模寫のやうな寫生をつづけてゐた。女の腰部の形がどうしてもつかめず、骨盤の前上棘の突起を我知らず指でつついて、モデルにきやあといはれたこともある。今考へると、これは分らう筈がない。分らうとするのが無理である。

私はその頃十代の若者であつたが、身を持すること堅固で、おしやれを知らず、ぜいたくを知らず、酒をのまず、女には近寄らず、ニキビを出しながら、ただ一心不亂に勉強に熱中してゐた。その勉強といふのが書物とか語學とか、ただ無茶苦茶な木彫修業とか、めくら滅法なモデル寫生とかいふことばかりで、生きてゐる自分の生命には更に氣づかず、人間としては頭ばかりの勉強で、第一、人間の肉體への渴望などはまるでなかつた。古往今來、彫刻の裸像がこんなにあるのは、皆人間の肉體への渴望、性本能から發する食ひ入るやうな、貧婪な、悲しい人間の肉體への慾情に基づくものであつて、この原動力がなくては裸像などほんとに作れるものでなく、學校でやつてゐた習作の如きは、雛人形にも及ばないつくり物に過ぎなかつたのである。それに氣づかずに、ああやつ

たら、かうやつたらと迷つてばかり居ながら、それでも形を整へたり、意匠をこらすことだけは人並に進んでゐたやうな次第である。

結局、美術學校に在籍してゐた間の勉強といふのは、まつたく彫刻以前の、そして彫刻のための下準備としての形而下的物象とその論理的追及の勉強に過ぎなかつた。モデルによつて人體は作つても、それは人體の標本に外ならず、解剖的精確さとか、輪郭線の美しさとかいふのが精一ぱいの山であつた。一時ミケランジェロの解剖研究の話などに刺戟されて解剖に熱中した時期があつた。學校の「藝用解剖學」の講義は久米桂一郎先生の受持だつたが、それだけでは滿足できず、今井博士の「實用解剖學」三册本を座右に置いて、人體の骨、腱、筋肉、血管等を暗記したし、又當時の帝大の解剖教室に見學を許されてよく通つたりした。教室の屍臭にも慣れて平氣になつたが、病死した屍體が多くて、筋肉がぺちやんこで困つた。どうかすると死刑になつた屍體が廻つてくることがあり、この時は筋肉がまだ生きてるやうに盛り上つてゐるので、目のさめるやうな思で勉強した。その頃は、人間の首を粘土で作るのにも、はじめ頭蓋骨を作つてから、それに腱や筋肉を一枚づつ著けていつて顏面にするやうなことをしたこともある。頭蓋骨だけでも、ほぼそのモデルじみてゐるのがをかしかつた。

彫刻科を卒業して研究科に籍を移すと、モデル代を生徒が出さねばならないので、私は多く子供を使つた。料金が半額だつたと記憶する。子供をモデルにしたのでは、「玉乘りの子供」の群像を作つたことをおぼえてゐる。これは朝早く、淺草の花屋敷の虎を寫生に行つてゐた頃、玉のりの小屋で行はれる子供達の練習の殘酷さを見て、公憤のあまり作つたものであつた。動物をモデルにすればモデル代がいらないので、よく上野動物園や淺草の花屋敷に時間よりも早く入れてもらひ、檻のそばでお客の來ないうちに油土で作つた。象、獅子、虎、熊、猪、鹿、鷲、鶴などが常連であつたが、虎には油斷をするとよく尿をひつかけられた。人をめがけて放尿する癖が虎にはある。あの頃は、河馬も駝鳥もペンギンもワニもチムパンジーも居なかつたし、動物園はずつと狹かつた。もつと以前には入口の向側に道路をへだてて土牢のやうな穴があり、そこに熊がゐた。

研究科の教室で私が仕事をしてゐるところへよく岩村〔透〕先生がやつて來て私の彫刻を見たり、外人の參觀者を引つぱつて來たりした。その岩村先生が私の父を說き落して、私をアメリカに行くやうにしたのであつた。美術學校を二十歲で卒業してすぐ研究科に移つたのは徵兵猶豫の爲であつた。官學に籍を置けば三十歲位までのばせるといふ定めによつたものである。〔下略〕

（高村光太郎著『アトリエにて』昭和三十一年六月。新潮社）

〔上略〕

美術學校が始つて私はそこに入つたが、正木〔久保田鼎の誤り——編者註〕さんが校長になつて暫くして彫刻科の中に塑造科を設けることになり、今迄一緒にやつてゐた生徒が木彫科と塑造科に分れた。私は元より木彫の方である。木彫の生徒は同時に塑造もやつたが、塑造科の生徒の方は塑造專門であつた。塑造科の方の先生は長沼守敬先生であつた。この人は不思議な潔癖家で、自分の說を一寸でも曲げないで直ぐ衝突するから、學校では勿〔忽〕ち喧嘩をして了つた。私の父が調停係になつてゐた模樣だが、最後には到頭學校を辭めて了つた。長沼先生は油土をイタリアから取り寄せ、油土で原型を拵へるのはその頃から始つたのである。粘土は後になつていぢり始めたので、その頃はどんな大きなものでも油土を使つた。それを石膏にとつてそれから三本コムパスと針とで石などに移すといふのが長沼先生のやり方であつた。長沼先生が止されてから

藤田文三〔蔵〕さんが教授になつたが、あの人の仕事は、何を拵へても同じになつて了ひ、非常に癖のある彫刻で、幼稚で餘りよくない。大層如才のない人で、生徒を甘やかして了つた。長沼先生は生徒には嚴しく仕事も眞面目で面白いところがある。學校に遣つてゐる老人の首なども眞面目に拵へてある。長沼先生は非常に藝術的良心があるといふのか、自分の彫刻などは駄目だといふので、日本中の銅像などは皆毀れて了へばいゝといふやうな否定的な考へ方になつて、晩年は彫刻を諦めて了つて自然を友として居るのを理想とし、彫刻界と交るのを厭がつて居られたやうであつた。當時の塑造科の人々の拵へてゐたものは今考へるとサロンの彫刻のやうなものだが、その頃はそれが非常に進んだものに見えて、木彫の方は時代に遲れてゐるといふ氣がしてゐた。〔下略〕

（「回想録」高村光太郎『美術』二巻一号。昭和二十年一月）

この回想記によると、長沼守敬の授業では裸体モデルを使用し、イタリヤ製の油土で原型を作って石膏にとり、それを三本コンパスと針とで石などに移すという彫刻法を教えたことがわかる。石膏取りとコンパスについては長沼自らも前出「現代美術の揺籃時代、長沼守敬」の中で次のように述べている。

美術學校では當時、誰も石膏の取り方を知らなかつた。私は助手を使つて教へてゐたのであるが、黒岩淡哉君が主になつて石膏取りを研究した。

先頃交通の危禍〔奇〕で死んだ動坂の宮島一といふ人は、美術學校出の人の由だつたが、この人は石膏取りの名人で私は彼にのみ頼んだが、私の最後の銅像である藤田傳三郎氏のを拵へた時は、〔「も」〕東京から宮島君をわざわざ大阪へ呼び寄せてやらせたものだ。宮島君は石膏をほんの少ししか使はずに薄くよく拔いた。それに支へる鐵の枠なども他の者に比べると細いのを少ししか使はずに、その技は堂に入つたもので、人に習つて覺えたといふより自分自身で永年苦心研究の結果、此の道に通達したのであらう。石膏を出來上つた泥の彫刻に薄く覆ぶせて型を取り、それに更に石膏を流し込む時、石膏の型に吸はして、後から注ぎ込む石膏と附着せぬよう、一般に牛乳か〔長沼自筆訂正本では「灰」〕石灰の汁を使ふものであつたが、宮島君はマルセル石鹸に少しオリーブ油を入れたものを使つてゐた。此の方が石膏の型に早く吸ひ込まれないから時間的に永く保つ。

伊太利では小さい石膏をやる時は拔くのに危いから、内面を寒天、外面は石膏の二重にしてやつてゐるが、これは宮島君も使はなかつたやうだ。

それから非才の私が、何か日本彫刻界に貢獻したところがありとすれば、それは當時の彫刻界にコンパスを使用する事を極力鼓吹したことであろう。當時、日本では誰一人コンパスを使ふ者がなかつた。名人光雲君にしてからが之を知らず、自分で習ふ事も工合惡かつたのであろうか、その弟子の米原雲海君に習はせてゐた。土からやる塑造はよいやうなものゝ石や木などで彫る場合單に見込みで丈けやると、材が足りなくなつたり深彫りしたりする失敗が起り勝である。ところがコンパスで三つの點を取り、比例を測定してから始めると全然この失敗がない。私は事ある毎にコンパスの使用を鼓吹し、東京彫工會でも此事を屢々喋つた。〔下略〕

彫刻科で油土に代わって粘土が用いられるようになったのは白井雨山の留学帰国後のことであった（174頁「十五年前の美術学校生活」参照）。

2　規程（「東京美術学校規則」、現行内規抜粋）